

東京大学広報誌 創刊号

TANSEI

The University of Tokyo Magazine
October, 1999 No. 1

淡青

特集 東大生のいま、むかし

[総長対談] ゲスト 町村信孝

[教育・研究の現場から] 教養学部 / 先端科学技術研究センター [世界の中の東京大学] 東京大学フィレンツェ教育研究センター
[サイエンスへの招待] スーパーカミオカンデ探検記 [キャンパス散歩] キャンパス樹木園

東京大学広報誌

TANSEI

October, 1999

創刊号



淡青

「淡青」について
東京大学と京都大学(当時は東京帝国大学、京都帝国大学)が1920年に最初の対抗レガッタを瀬田川で行った際、抽選によって決まった色が「淡青(ライト・ブルー)」であり、本学の運動会をはじめスクール・カラーとして親しまれてきました。

刊行のごあいさつ

21世紀がまさに目前に迫ってきました。社会の変化のスピードがさらに速まり、地球がますます狭くなるなかで、情報もつ重要性は加速化され、その量だけでなく質の向上も求められています。このようなときに、本学も多くの皆様に読んでいただく広報誌の刊行にこぎつけることができました。

現在はまた、大学の存在が今までになく社会から注目されている時代といつて良いでしょう。私たちが私たちに学外の方々を知っていただきたいという願望、そして学外の方々が私たちに向ける関心、その双方を満たす媒体としてこの広報誌を位置づけたいと思っています。その先にあるのは、双方のインターフェースの構築でしょう。

創刊号では、卒業生であり文部大臣、外務政務次官を歴任された町村信孝さんと蓮實重彦総長との対談、そして特集として『東大生のいま、むかし』を取り上げました。「教育・研究の現場から」「世界の中の東京大学」「サイエンスへの招待」は本学が行っている教育研究の紹介のページ、「キャンパス散歩」と「インフォメーション」は本学に親しんでいただくためのページです。

今後、年に2号のペースで刊行する予定です。皆様のあたたかいご支援と、忌憚のないご意見をいただきながら、本学と社会とのインターフェースの発展に貢献できるよう本誌を育てていきたいと考えています。

(東京大学広報委員長 大塚柳太郎)

総長対談

ゲスト

町村信孝

外務政務次官(前文部大臣)

対談当時(一九九九年七月一四日)

中と外から

どうすれば日本の大学が今もっている力をもっと有効に発揮できるのか。
町村信孝外務政務次官(前文部大臣)をお迎えして、東大、そして教育問題について熱く語っていただく。

みづめる



町村信孝

Nobutaka Machinura

一九六九年、東京大学経済学部卒業。
同年通商産業省に入省し、ニューヨーク日本貿易振興会(JETRO)出向など、多彩な活躍をする。一九八三年から衆議院議員。一九九七年、文部大臣。一九九八年〜一九九九年一〇月、外務政務次官。



蓮實重彦

Shigehiko Hosumi

一九六六年、東京大学文学部卒業。
大学院人文科学研究科に進むとともに、留学したパリ大学から一九六五年にPhDを授与される。帰国後、立教大学を経て一九七一年から本学教養学部、一九九三年、教養学部長。一九九五年、東京大学副学長。一九九七年、東京大学総長。

総長対談 中と外からみつめる

蓮實 東大で広報誌を出すことになりました。その第一回に、町村外務政務次官に卒業生としてご登場願ったというわけです。理由はいくつかあるのですが、まず、今年は一九六九年の三十二年目にあっています。一月一日と二月一日……
町村 「団交」ですね(笑)。

蓮實 そこで活躍になりまして、ご卒業後は官界に進まれ、その後、アメリカに行かれ、政界に進まれ文部大臣はじめ多くのポストについてこられました。この三十二年を、日本の歩みとか東大の歩み、それからご自身の歩みとも重ね合わせて、うかがえればと思います。

町村 この創刊号に、あまたいらっしやる卒業生

の中からご指名を受けたことを心から感謝いたしますし、光栄に存じております。

今のお話ですが、私が大学に入ったのは六三年です。ところが、産経新聞のスカラシップを受けて留学でき、公務員試験を受けるというので卒業が少し遅れ、六九年には二四歳でした。

前年の春ころから大学紛争の動きが医学部を中心にありました。夏ごろに、経済学部もご多分に漏れずにストライキに入ったわけです。私は全共闘でも民青でもない学生諸君と議論しながら、自分たちが大学を変える努力をする必要があるだろうと、一月ごろ自分たちでストライキ実行委員会書記局というものをつくって、全共闘の諸君か

ら自治会を取り返し、二月月ほどストライキのリダーをやりました。

一二月に東大入試が中止になるという話が流れる、もしストライキが大学入試の阻害要因になっているのなら自ら解除しよう、一二月末にストライキは解除しました。きちんと区切りをつけなければいけないということで、加藤一郎総長代行と話し合いをする中で、確認書をつくらう、それには皆の前でということ、秩父宮ラグビー場で行ったわけです。私は七学部全体の議長という名前を勝手につけていました。

ある種の閉塞感というのでしょうか、当時の大学が本当にこれでいいんだろうか、十年一日のごとく、黄色くなった表紙のノートを全言筆記させるといふ講義さえあったわけです。私はアメリカの大学に三年のときに留学したので、その比較も自分の頭の中でしていたのです。

蓮實 私はちょうどそのころフランスでの四年間の留学から帰ってきたところで、まず立教大学に就職しまして、七〇年から東京大学にまいりました。私もこの大学はもっと良くなるはずなのに、機能が十分に発揮されていないということを非常に強く感じておりました。

卒業後は、通産省に入られましたね。
町村 経済を多少かじって、日本経済の発展に少しでも役立つには役所かなと単純に思い、通産省にいったわけです。海外に行くかどうかでも自分の国を意識せざるを得ないわけで、実は留学したときに政府で働くことと思ったのです。

私はもう一度勤務でアメリカに行つて、ニューヨークのJETROで働いたとき、子供たちは普通のアメリカの公立学校に入れました。すると、日本の学校と違って、子供たちが生き生きと学校に行く。日本ではややもすると苦しみに行くみたいな感じがあったので、どうしてこんなに違うんだらうかと思つたわけです。

自分自身の大学での経験、子供たちの小中学校



1999年7月14日、懐徳館にて

中は三割は女性にしよう、ということをやりました。

蓮實 ちょうど町村文部大臣のときに諮問が出まして、私は途中から大学審議会の委員になったんですが、一年間に九九回集まり、答申が出ました。それを読みますと、優秀な検討チームをつくれれば三人で三週間できる内容なんです。それを忙しい方々が九九回も集まり、最終答申案を前にして言句をまだ変えている審議会で、私は皆さんはマゾだと申しあげたんです。

町村 政治の反省を含めていうと、意思決定に時間がかかりすぎるのは、まったくそのとおりです。昔は、重要法案は一国会一本と言われてきました。今は三本も四本も通してけしからんとマスコミのみなさんがご批判されるのは、世の中の変化のスピードがわかっておられないのではないのでしょうか。役所もそうです。

蓮實 東大は、意思決定は早いんです。総長補佐体制というのがありまして、学部と複数の研究所からおいでいただいて、毎週月曜日に二時間ほど会議をしています。問題は、そこに出てくださる方が、今いちばん輝いておられる研究者だということです。その方々が一年に三十数回集まり、ワーキンググループをつくって審議する。それを評議会で通す。だから一部の反対で評議会が空転することはまずありません。必要なプロセスは踏むべきですが、日本では時間をかけることが誠意の表れと思われすぎていますね。

町村 東大はそうやって効率的にやっておられるのだからうけれども、私はいくつかの大学を拝見しましたが、評議会で物事が決まらずに、学部の教授会に全部持ち帰って、極端にいえばすべての先生方がOKと言わなければ批准できないという仕組みでしょう。今度、評議会と学部教授会の権能を明確に分けるという法律改正が通りましたが、本当は法律改正をしなくても、学内の運用でいかようにでもできるはずだと、内部でずいぶん

言ったんです。

蓮實 今の日本で危険なのは、制度を変えようと考えるだろうという思想です。現制度でうまく運用すれば良くなるはずなのに、意識が変わらないのでそれにがんじがらめにされている。大学には知性があるはずだから、もう少し柔軟に対処しなければいけないはずですよ。

町村 私が大臣のときに、学生の成果の評価という話がありました。成績評価をきちんとやりましょうということですが、こんなのは法律ではなく、まさに一人ひとりの先生方の意識の問題です。ただ、一生懸命に採点をする、あの先生は厳しいからゼミも受けなさいということ、次の学期に学生が来なくなる。やはり悪質は良質を駆逐してしまうんでしょか。

蓮實 日本では大学は研究者の集まりだという意識が強すぎますが、まず教育者の集まりでなければいけないと私は思っています。もちろん研究は当然ですが、世界的にすぐれていても、教育の第一歩をご存じない方が多い。声が聞こえなくてもよい、学生が騒いでいても気にしないというようなことがあって、結局はだれも聞いていないということになるのです。

町村 私がアメリカで留学したのは、ニューヨークランドにある小さい、比較的歴史の古い大学でした。一年生向けに一人くらの教室もありました。大部分は最初から小人数の教室でした。たいへん違うと思ったのは、本郷では先生の全言筆記ということさせられることが多かったのですが、そんな授業はまったくない。テーマをばんと与えて、その場ですぐにディスカッション。それをひととおりやってから、これこれの本を明後日までに読んでくるようにと、猛烈に本を読ませる。要するに、自分の頭でものを考えさせることを訓練しているんです。

日本の教育は小さいときから、考えるよりは計算の技術であるとか問題の解き方を習い憶える

での経験から、日本の教育をなんとか改めようと思いました。政治家になれば、少しはそういうことに自分で取り組めるかもしれない、そんな思いもありまして、一三年間の通産省勤務を辞めて政治家になり、真っ先に文教委員会に希望して入ったんです。

その後、文部政務次官を平成元年から一年やり、その後幸いなことに文部大臣を仰せつかったものですから、なんとか自分が大臣のときに教育改革に一定の道筋はつけたと思います。家庭教育に始まって大学、大学院、研究教育といったものについて、たとえば中央教育審議会、大学審議会といった審議会に答申を出してもらうなど精力的に取り組みました。

変革の視点

蓮實 はからずも六九年から今日まで、教育にかかわっていただきまして、大学の歩みのほうが遅々として進まないという印象を、おそろくおもちだと思えます。私は六九年の精神が大学を変えざるまで二年かかったと思うのです。変化のきざしが八九年ごろから出てきて、たとえば教養学部の改革とかですね。なぜ二年かかったかということ、年齢構成のような気がします。

町村 そのころの学生や院生の方々が、そろそろ教授になられたということですか。

蓮實 日本社会の年齢構成がもう少し自由である、ことによるともっと早かったかもしれないという気がします。今おっしゃった、審議会の年齢構成も問題だと思えます。大学審などに出席していただいても、六歳を過ぎている私がいちばん若いのではだめだと思つのです。

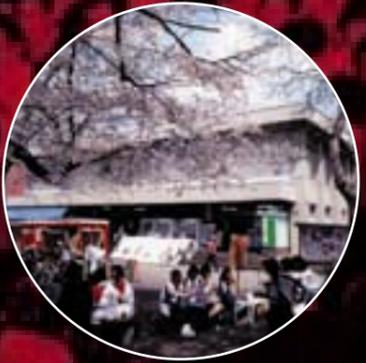
町村 おっしゃるとおりですね。そもそも、何でもかんでも審議会にかけるといのはおかしい。それとも一つ、女性が少ないことです。政府の目標は二割を女性にするといふんです。私の在任

という面が強くなります。教育だからそういう部分が必要なのはわかるんですが、大学に至るまで、とにかく憶えさせることに偏した教育ではないのかなと思つのです。たぶん明治以来の、追いつき追い越せに必要な手段だったのでしょうか。

蓮實 教授の言葉の全言筆記は論外ですが、大教室の授業をマスプロ教育と呼んで悪者扱いするのは反対でして、教師たるものは一時間半なり二時間半、大教室で学生を引きつける能力がなければいけないと思っています。フランスでも、それができる先生とできない先生がありまして、できれば学生がいなくなるから消えてしまつ。ですから、そのための努力を先生方は大変やっておられます。その雄弁術を日本人は若干甘く見ているところがあるのではないのでしょうか。一時間半の大教室の授業ができない人は、教師として失格でしょう。それと同時に、それをカバーするような小人数の授業とが二本立てになっているといいと思います。

町村 国際会議に行く、日本人はスリープ、スマイル、サイレンスの三Sというのですか、とにかくだめだといわけです。私もいま外務政務次官として国際会議などに出ると、英語のハンディキャップのあるなしは別にして、やっぱり彼らはうまいですね。彼らは日本語でしゃべっても、きつと上手だろつと思つんですが、われわれは下手なんです。きつと訓練の足りなさ、意識の足りなさなだらつと思えます。

蓮實 東大に留学生センターというものがありまして、そこで一学期が終わつた後に、それぞれの国の代表の人にほぼ一分ほど話してもらつんです。アジアの人も、ヨーロッパの人もいます。これが日本人の学生の発表よりもはるかにうまい。まず、おもしろいことを言う。人を引きつける。笑わせる。これは一度外部の方にも見てもらおうと思つています。



いま、本郷・駒場で学ぶ学部学生は約1万6000人、大学院学生は約1万1000人、そして両キャンパスだけでなく全国に散らばる教職員も含めるとその数7700人強。これが、構成する人びとの数から見た東京大学である。40年前、大学院学生は学部学生の15パーセント程度でしかなかったから、この数字は「大学院を重点とする大学」に変貌しつつある今日の東京大学の姿をよく物語っている。

にもかかわらず、学部学生が東京大学の最大多数を占めるという事実は、今のところ変わらない。

特集 東大生のいまむかし

東大生のいま、むかし——。「東大生」として括られることに窮屈さを感じるひとりひとりの若者がいるはずだ。「東大生」としてことさら話題にされることに違和感を感じる者も少なくないだろう。「いまどきの」東大生を語る語り口に「底意」を読みとる者もいるにちがいない。

それもこれも承知のうえで、まずは「東大生」を、時間の流れのなかでとらえてみようとするささやかな第一歩が、この特集である。東京大学の内と外とのあいだでの、東京大学のなかでの、そしてひとりひとりの「東大生」の胸のうちでの、議論のタネとなることを期待したい。

特集 東大生のいまむかし

生活実態調査 にみる東大生

一九五〇年度からほぼ半世紀にわたり、継続的に実施されてきた学生生活実態調査。その興味深い調査結果から、社会状況とともに変化する東大生の姿がユニークに浮き彫りにされる。



本学の学生生活実態調査は、一九五〇年度からほぼ半世紀にわたって継続的に実施されている希有な調査である。この調査は、戦後の混乱期に貧しい学生たちの学生生活を、少しでも豊かで充実したものにしようという問題意識にもとづいて立ち上げられた。初期の、手書きのガリ版印刷で仕上げられた報告書の赤茶けたページには、当時の学生たちの経済状態が事細かに分析・記述されている。五〇年代後半から六〇年代にかけては、それまで経済生活に限定されていた調査内容に、生活時間やサークル活動の実態といった、大学生生活全般にかかわるものが含まれるようになる。また、年度によっては、女子学生や大学院学生を対象とした調査が企画され、多様な学生たちの生活実態が明らかにされる。さらに、紛争後の七〇年代になると、不安・悩みや友人関係、入学動機や就職希望といった、学生たちの意識にかかわる質問が多く設定されるようになる。これは、学生をめぐる主要な問題状況が、経済問題から生きがいや対人関係の問題にシフトしたことを物語っている。

そして八〇年代以降は、語学学習や海外旅行といった国際化への対応、コンピュータなどのニューメディアの利用状況、ボランティア体験や社会問題に対する意識など、現代の社会状況に合わせた設問が毎年工夫され、付加されるようになってきている。

ここでは、「東大生は、どこから来るのか」「東大生は、どのような学生生活を送ってきたのか」「東大生は、何を考えてきたのか」という三つの問いを設定し、東大生の姿に迫ることにしたい。ただし、設問項目の内容や個々の項目のワーディング自体が変化している場合が多く、ここでの比較はあくまでも

大ざっぱなものであることをあらかじめお断りしておきたい。

東大生は、どこから来るのか

本調査では、初回から継続して、対象者に「家庭の所在地」と、主たる家計支持者の職業をたずねてきた。この結果をもとに、「東大生は、どこから来るのか」という基本的な問いについて考えてみよう。

図1は、家庭の所在地を地域別にまとめたものである（かつての調査は男子を中心に実施されていたため、第一回から第二九回の数字は「男子」のみのものを、第三四回以降は「男女」のものを示している）。

東大生の出身地域には、それほど顕著な変化はみられないというのが第一印象である。しかし、ていねいにみればいくつもの傾向があらわれてくる。まず第一に、「東京」出身の学生が減少傾向にある。六〇年代なかばまで四割以上を占めていたが、七〇年代に入ってから三割以下になっている。逆に、「関東」の占める割合はほぼ一貫して増加傾向にある。また、一時期は一桁にとどまっていた「近畿」からの入学者は、このところ微増している。

これらの数字が物語るのは、以下のような事実である。戦後の改革によって各地に大学ができ、東京大学の東京ローカル化が一時進んだものの、その後の学歴社会化の進行にともなう、受験競争が全国化し入学者の東京集中傾向は和らいだ。「関東」の数値の上昇は、一方で東京を取り巻く関東圏のベッドタウン化による人口増加の影響とみることができ、他方では地元志向がより強い「女子」が含まれるようになった結果と考えることもできよう。

出身家庭の職業については、一九八四年に

学生は、社会に出ること 自体にハードルを感じている



佐々木 毅

先生が卒業された1965年の調査では、生活のためにアルバイトをするのは過去の話、とまとめられています。実感としてはいかがですか。

佐々木 東京オリンピックで人々の生活が変わったといわれるけれども、学生までそうなるには、もう数年必要としたように思います。われわれが大学にいて豊かさを感じたのは、やはり紛争のときですね。たとえば僕が学生だった頃

は、ほとんど学生服です。それが紛争のとき、「大学の権威の象徴みたいなものは着るか」ということで変わった。自家用車にゲバ棒を積んでくるのを見て、ビックリした記憶があります。さらに変わるのが70年代から80年代でしょう。象徴的なのは、大学の建物がいかに貧しいかを、学生が公然と言いついたことですね(笑)。それまでは、総合図書館をはじめ、自分の住んでいるところよりもはるかに立派だと、みんな思っていたわけです。ところが、だんだん「ここが一番貧しいぜ」という感じが出てくる。これは大学にとって大問題です。

学生の出身家庭にも、かなり大きな変化がみられます。

佐々木 良し悪しは別として、出身階層が均質化されてきたのではないのでしょうか。管理職層が日本社会にエスタブリッシュされて、こうしたシステムの上層部分の子弟が入学してくる。社会的流動性における上昇通路としてのモードよりも、むしろ再生産の感じが強くなっています。

それにつれて、学生の意識も変わりつつあるようです。

佐々木 昔だって、誰がどこに就職した、自分はどうする、といった話はもちろんありました。しかし、今は就職そのもの、社会に出ること自

体にある種のハードルを感じているのではないのでしょうか。ちょっと話を大きくすると、大学受験に向けた生活様式というのは、人工的につくられたものですね。生活も豊かになってきたから、社会の厳しい現実を見ないでもやってこられるわけです。ところが、就職のとき一挙に変わる。就職を通じて、人生と社会の問題が全部出てくるような仕掛けになっている。それが就職そのものへの不安になるのでしょう。専門職志向も、このことと無縁ではありません。自分に対する不安感があるので、大きな組織のどういう地位に就くかということよりも、自分はどういう能力をもっているというほうが、生活感覚にビックリくる。いざとなっても何とか食べていけるということでしょう。こうした学生の意識と、たんなるホワイトカラーを必要としなくなりつつある社会とが、相互促進関係で学生の専門職志向を高めているのではないのでしょうか。実際、法学部でも司法試験を受験する学生が非常に増えています。反面、公務員試験のほうは減少がみえますね。

ささき・たけし 1965年法学部卒、大学院法学政治学研究科長・法学部長。

をA〜Eの五段階に分けて捉えることが行われていた。たとえば、第六回調査(一九六五年)では、必要度A「アルバイトをしなれば自分の生活は成り立たない」という者が一三パーセント、必要度B「アルバイトをしなれば学業を続ける見込みは全くないが、生活は辛うじてできる」という者が一四パーセント存在していた。四人に一人以上が、バイトをしなければ生活がたちいかないレベルで学生生活を送っていたのである。その中身は、今と同様「家庭教師」が多かったようであるが、少なからぬ学生が「勉学の時間が不足する」とか「過労のため健康が心配」という困難・不安をかかえていたようである。

それが、すでに一九六五年の時点で、つぎのような解説がほどこされるようになっていく。「最低生活を維持するためにアルバイトを求めたのは過去のことです。今日ではむしろ、スキーに出かけたり、レコードを買ったりするたために、アルバイトは必要なのである。」調査項目に、はじめて「耐久消費財」の所有状況が加えられたのが、一九七一年の第二回調査であった。しかしその段階では、「テレビ」「冷蔵庫」「洗濯機」「パーセント」という水準であり、「クーラー

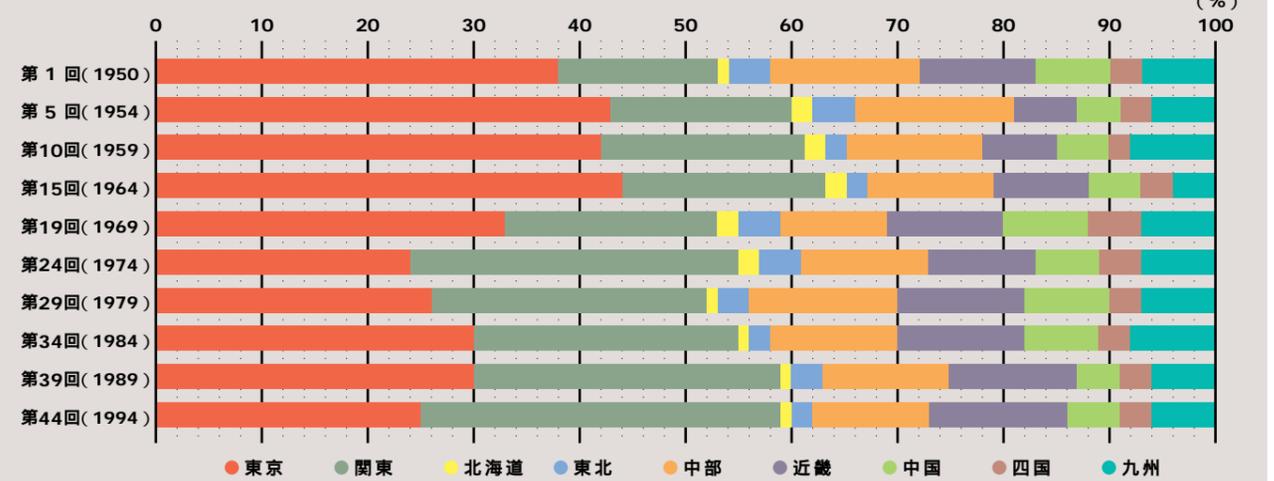
【表1】読書について

	最近興味深く読んだ本	よく読む雑誌
第1回 (1950)	きけわたつみのこえ 細雪 チボ一家の人々 ロマン・ロランのもの 風と共に去りぬ	文藝春秋 世界 新潮 中央公論 小説新潮
	好きな作家	
第20回 (1970)	高橋和巳 三島由紀夫 井上 靖 北 杜夫 夏目漱石	朝日ジャーナル 少年マガジン 世界 文藝春秋 中央公論
第29回 (1979)	夏目漱石 北 杜夫 芥川龍之介 太宰 治 井上 靖	週刊朝日 びあ 朝日ジャーナル 文藝春秋 少年マガジン
第39回 (1989)	夏目漱石 司馬遼太郎 村上春樹 太宰 治 アガサ・クリスティ	ビッグコミックスピリッツ びあ アエラ 少年ジャンプ ニューズウィーク

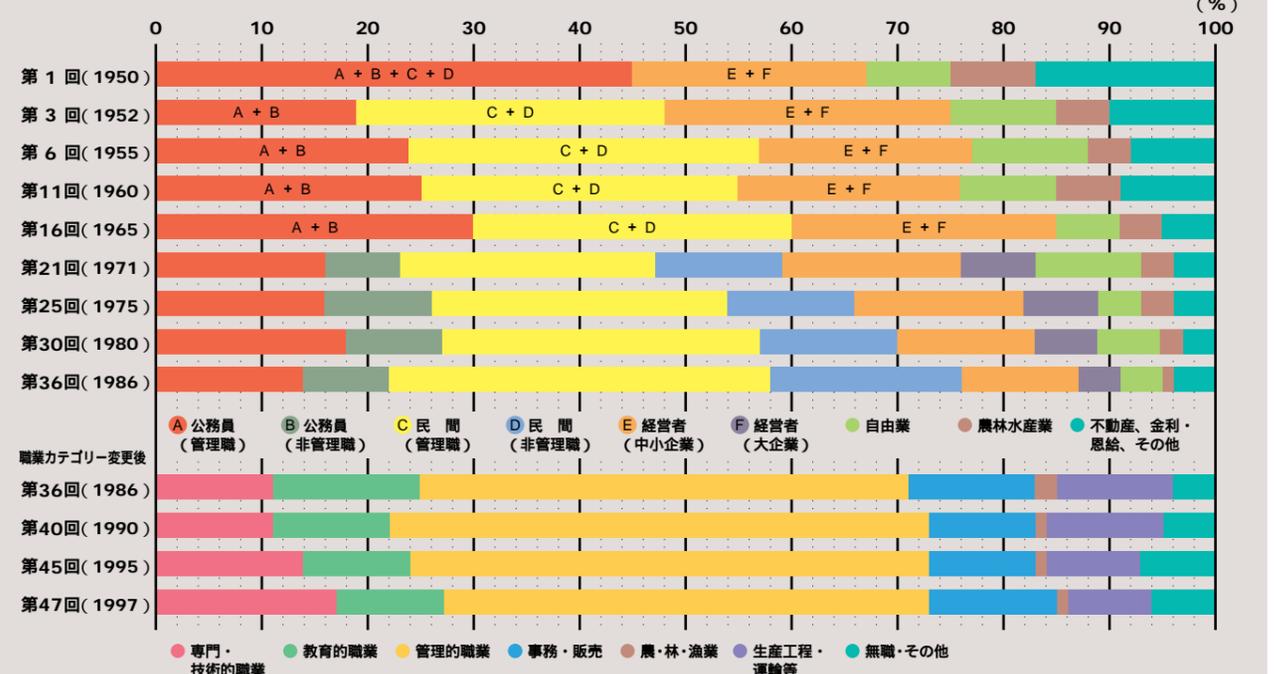
「エアコン」「電話」「パソコン」といった選択肢はまだ用意されていない。最近(一九九六年)の第四六回調査では、ステレオコンポ(八四パーセント)、「ウォークマン」(七三パーセント)、「テレビ」(五九パーセント)、「電話」(五四パーセント)、「ビデオデッキ」(四四パーセント)、「パソコン」(四一パーセント)など、情報通信や映像音楽にかかわるパーソナルメディアが急速に普及している。

表1は読書について、「好きな作家(最近興味深く読んだ本)」と、「よく読む雑誌」の二項目をピックアップし、四時点にわたって整理したものである。調査がはじめて行われた一九五一年の東大生たちは、「文藝春秋」「世界」「中央公論」という、いわゆる三大総合雑誌を愛読していた。それが、一年後には「少年マガジン」があらわれ、二年後には「びあ」が登場し、約三年後の八九年には、

【図1】出身地



【図2】家庭の職業



東大生は、どのような学生生活を送ってきたのか

初期の調査には、アルバイトの実態を探ろうとする企画が目立つ。とくに五十年代には、学生個人にとってのアルバイトの必要度を

実施された第三四回の時点で、職業カテゴリが抜本的に改められたため直接的な比較はできないが、図2から以下の傾向を読み取ることができよう。もっとも目につくのは、年を追うごとに「給与生活者」(AからDの四つのカテゴリの合計)の割合が増加していることである。一九五一年代前半には四割台であった比率は、五十年代後半から五割台に、七十年代後半には六割台に、八十年代には七割台に到達した。こうした傾向は、わが国全体の職業構造の変化を如実に反映するものであるが、つとに指摘されるように、東大生の場合、親が管理的・専門的な仕事についている比率がとりわけ高い。八十年代後半以降は、半数前後が「管理的職業」の親をもっている。「専門・技術的職業」を合わせると、九十年代には全体の何と六割以上がそれらの階層の出身者となっている。

前述した職業カテゴリの見直しは、国勢調査の分類に準拠することによって、ほかの調査との比較を可能にするためのものであった。実際、一九八六年の第三六回調査では、東大生の家庭の特徴が全国調査の結果と比較されている。そこで明らかにされているのは、管理職(とくに公務管理職)層出身者の多さであり、農業を含む自営業や民間非管理職層からの輩出率の低さである。東京大学は、歴史的にみて、全国から「恵まれた」家庭の子女を集める役割を果たしてきたといつて、まちがいはないだろう。

隔週のマンガ雑誌「ビッグコミックスピリッツ」が東大生の愛読書ベスト1になったのである。

表2は、「自宅外生」の一月あたりの平均支出額とその内訳をたどったものである。食費と住居費を分けるようになった第二九回調査から、家計にシめる住居費の割合が上昇をはじめ、第四七回には何と四パーセントを超える水準にまで達する。これは、自宅外生のすまいが下宿や学寮からアパートやマンションにシフトし、学生気質が大きく変化したことのあらわれとみることができよう。それに呼応するように、勉学費、勉学に必要な書籍代などの占める割合が下降し、衣料費という費目が設定されるようになった第三九回以降は、六、七パーセントで両者が拮抗するような状況になってきている。今どき服代と同じだけを本代に使うのは東大生くらいだろう、という見方もできなくはないが、それにしてもやや寂しい結果ではある。

【表2】1カ月あたりの支出額とその内訳(自宅外生) (単位:円、カッコ内は%)

	支出総額	食費	住居費	衣料費	勉学費	教養娯楽費
第5回(1954)	8,760	5,180 (59)	-	-	1,160 (13)	880 (10)
第10回(1959)	11,470	7,300 (64)	-	-	1,270 (11)	1,700 (15)
第15回(1964)	19,600	11,900 (61)	-	-	2,090 (11)	2,990 (15)
第19回(1969)	30,560	18,790 (62)	-	-	4,230 (14)	3,250 (11)
第24回(1974)	63,200	40,100 (63)	-	-	7,900 (13)	8,300 (13)
第29回(1979)	89,600	32,600 (36)	23,500 (26)	-	10,800 (12)	12,100 (14)
第34回(1984)	110,700	35,900 (32)	31,700 (29)	-	11,100 (10)	17,400 (16)
第39回(1989)	138,800	37,300 (27)	45,800 (33)	10,000 (7)	10,400 (7)	20,000 (14)
第44回(1994)	154,600	41,700 (27)	59,100 (38)	10,000 (6)	11,000 (7)	19,500 (13)
第47回(1997)	153,100	39,400 (26)	62,500 (41)	10,400 (7)	9,800 (6)	18,000 (12)



東大生といわれたとき、どの部分を負えばよいのかむずかしい



文学部4年 宮崎刀史紀さん

—— 現在、学生のアルバイト事情はどうですか。
宮崎 僕の周りには苦学生という言葉を実感できる学生はなかなかいません。アルバイトをする理由も食べるためというよりも、雑誌やCD、旅行などのためという面が強いと思います。また、コンビニや喫茶店といった、家庭教師や塾講師など以外のバイトをしている東大生も増えて

いるようです。これを社会勉強といえば格好よいですが。
—— 学生の持ち物も大分変わったようですね、携帯電話とか。
宮崎 たぶん僕らが、大学で初めて携帯電話を持った世代です。僕も、ついに加入しました。サークルやゼミの連絡などのほかに、「いま、暇?」といったようなことまで実に多くのやりとりが行われています。電子メールも同様です。「飲み会の情報が来ない!」といったように、持っていないことで情報網から取り残されるように感じることもあったくらいです。
—— 「よく読む本」も、総合雑誌から情報誌へという変化があります。
宮崎 コンビニで情報誌を見て、それから買い物というのが、今の大学生の行動として基本ですよ。僕が所属している東京大学新聞でも、昔に比べれば軟派な記事が多くなりました。僕は大学院進学を希望していることもあり、関係のありそうな論文を読むことはありますが、毎月必ず総合雑誌を買うということはないです。
—— 4年生ともなると、やはり心配の種は就職活動ですか。
宮崎 文系だと3年生の年明け頃から、ちらほら就職の話が出はじめて、3月になると戦争突入

という感じです。4年生の夏休み前まで、友達同士が会ったときの話題はもっぱら就職で、大学生というよりも就職活動生みたいな感じになります。
—— 宮崎さんにとって、いまどきの「東大生」とは、どのようなイメージなのでしょう。
宮崎 「東大生というの、いわゆる普通の大学生なんだ」といいたくもあり、「いや、やっぱり東大生は違うんだぞ」といいたい部分もあるわけ。本気で学問の先端を目指し、あるいは様々な目的のために図書館で勉強三昧という学生がたくさんいて、そういう人々と共に学べるというのは東大生としての誇りです。だからといって、東大生は勉強だけの人か、というそうでもない。「大学生」として立派に遊び、悩み、生きているわけです。ですから、「東大生といわれたとき」にどの部分を負えばよいのか、とてもむずかしい気がします。ましてや「東大生でしょ?」といわれたとき、われわれは半ば発言を禁じられているわけです。「君は何大生?」とは、なかなか聞けないですよ(笑)。

みやざき・とき 文学部行動文化学科(社会学)4年、東京大学新聞社編集部員。

東大生は、何を考えてきたのか

意識にかかわる項目が多く設定されはじめたのは、学生紛争が終結した七十年代にはいつてからのことである。一九七三年のオイルショックの年に実施された第二三回調査では、東大入学にまつわる意識に焦点があてら

れた。その時点で、「どつしても入りたかった」と答えた者は全体の四四パーセント、それに対して、「だめなら他大学でよかった」と答えた者が三八パーセント、そして、「なんとなく」という答えが一八パーセントであった。そうした分布状況は、今日にいたるまで変わっていない。

「入学動機」については、一八年代までの上位群は、「スタッフ、設備の充実」「国立大学である」「難関を突破したかった」で不動であるが、九十年代にはいつて、学生たちの入学動機はやや変化をみせているようである。すなわち、新たに設けられた「社会的評価が高いから」「東大の伝統や雰囲気にあこがれて」といった項目への回答が目立つようになり、いわば「東大のブランド性」への積極的な評価がみられる。かつては「難関突破」という色彩も強かったものだが、今日ではそうした発想はあまりはやらないようである。

表3は、在学中の「不安や悩み」についてたずねたものである。年代によって項目や回答方式に若干のバラツキがあるものの、各回における上位五項目を並べてみた。一見して気がつくのは、かつては「人生の目標・意義」や「自我の確立」などといった根源的な人生への問いが上位にあったものが、今日では「就職」「進路・進学」「勉学(成績・単位等)」といった、「目の前のハードル」的なものが上位をしめている。また、「性

異性・恋愛」が第五位とはいえ、第三九回以降でランクインしているのも目を引く。煩悶青年から現代的若者への変化とでも、形容できようか。
サークル活動についても、今日では、友人を得たい「居場所をつくりたい」「異性と交際する機会を持ちたい」といった理由で加入する者が目立っており、「人間性を磨きたい」とか「真剣に人生を考えたい」といった古典的な理由はかけを潜めるようになってきている。
最後に、学生たちの進路意識・就職意識についてである。学生たちに進路希望をはじめて聞いた一九七三年の第二三回調査では、「企業」「三三パーセント」「公務員」「二五パーセント」「自由業」「二パーセント」「教育職」「一五パーセント」その他「八パーセント」であった。いまだ学生紛争の余韻がさめやらぬ時期であり、企業就職の不人気が目につく結果となっている。職業選択の際に重視する要因としては、「適性・能力・専門が生かせる」「やりがいのある仕事」「生活の安定」「社会の幸福に役立つ」「他人から拘束されない」の順に、多くの学生の支持を集めている。



それから四半世紀を経た一九九七年に実施された第四七回調査を、それと比較してみると、どのような傾向がうかがえるであろうか。端的にいうなら、学生たちの就職意識は不思議なほど変化していないようなのである。すなわち、希望の職業としてもっとも多いのが「大学・官公庁の教育・研究職」「二四パーセント」であり、以下「専門職(医師・弁護士など)」「二パーセント」「技術職」「二パーセント」「公務員」「一パーセント」とづく。選択理由も、多い順に「自分の特技・能力や専門知識が活かされる」「人を助けたり社会に奉仕する」「安定した生活が保障される」「組織にしば

志水宏吉(しみずこうきち) 学生実態調査委員会委員長、大学院教育学研究科助教授

【表3】不安や悩み

	1位	2位	3位	4位	5位
第12回(1961)	人生の目標・意義	卒業後の進路	自我の確立	人とのつきあい	才能
第26回(1976)	人生の目標・意義	卒業後の進路	自我の確立	才能	人とのつきあい
第32回(1982)	卒業後の進路	人生の目標・意義	将来の職業	人間関係	性格
第39回(1989)	就職のこと	勉強のこと	進路・進学	人生の目標・意義	性・異性・恋愛
第45回(1995)	就職のこと	進路・進学	人生の目標・意義	勉強	性・異性・恋愛

注: いずれの回も、選択肢の中から、「最も大きな問題(不安や悩みの対象)と感じられるもの」として選んでもらったものである。

本郷の主

に聞く

佐野時計店 佐野利一さん

昔の学生さんは、学問に熱中している雰囲気がありましたよ。一人で孤独に勉強していた。個人で学問に向かっていくという感じだったんです。



東京大学の歴史とともに六五年

どことなくノスタルジーを感じる法文二号館の地下、食堂の向かいに並ぶ店のなかに、時計屋さんがあるのをご存知だろうか。時計屋さんといっても、きらびやかな時計を並べる時計屋さんではない。時計修理専門の店そこで、もくもくと細かい作業をつづけるのが佐野利一さん。若い頃はさぞかしもてたと思われる笑顔の素敵な時計職人さんだ。

昭和六年に父親が開業したこの店に、昭和八年から勤めているから、佐野さんは六五年の間、東京大学で過ごしていることになる。「この六五年で一番印象的な出来事ですか。そうですね。昭和一八年だったかな、学生さ

んが兵隊にもっていかれた学徒動員ですかね。講堂の前が当時は広場になっていてね。一人くらしい召集される学生さんがそこにずらっと並んでね、総長のお話をお伺いし、そのあと隊を組んで宮城（皇居のこと）前に行進するんです。そこでほかの東京中の学生と東条首相の訓辞を聞きましてね、家に戻って二、三日して出征ですか。私はそのとき二五歳で、それまでに野戦に五年近くいってまして、戦場の大変さを身にしみえて知っていましたから、かわいそうでね。それも、戦争でいくらか役に立つということ、法文経の学生が連れていかれたんですよ。そのときは涙がこぼれましたね。なにしろ何も知らない若い学生さんなんですから。」

時計屋の主人とお客さんの立場と控えめにおっしゃっているが、佐野さんに愛用の時計を直してもらうためにわざわざ遠いところからくる客も多いようだ。東京大学の表向きのことならば、だいたい何でもご存知という佐野さん。とても八十一歳とは思えないほどの元気で、今日も東京大学の歴史を、時計とともに刻んでいる。

キャンパスの主からみた東大生

本郷、駒場、それぞれのキャンパスで長年にわたり、東大生と触れ合い、そして東大の歴史そのものを見続けてきたキャンパスの主。

そんなおふたりに、東大とともに歩んだ人生を振り返りながら、語っていただく

東大生気質のいま、むかし。

聞き手 飯田泰雄、小川明子 大学院人文社会系研究科社会情報学専攻修士課程

特集 東大生のいまむかし

駒場の主

にきく

元教養学部職員 石山恭枝さん

最近は先生も学生も職員もみんな忙しくして、会話や議論が減ってしまっています。学生の特権は、社会に出る前に距離をとったり、考えたり議論できるということだと思つてます。

青春時代から三 余年

一気に駆け抜けた駒場

六本木にある東京大学生産技術研究所にお勤めの石山恭枝さんは、一九六五年から一九九八年まで駒場の体育教官室で会計兼庶務を担当された。

「私は定時制の夜間の高校にいてまして、その四年生のころからこちらで仕事をやるようになりまして。勤めはじめ、東大の学生さんが一生懸命勉強しているのを見ていたら勉強したくなってきましたよ。それから夜間の大学に通いだしたんです。だからはじめのうちは、昼は職員、夜は学生という二足のわらじをはいていました。」

そのあと、駒場に三 年以上勤務されました。

た。一番印象的だったことはなんでしょう。「それはもう大学紛争です。私は昼は職員で夜は学生でしたから、学生がバリケードを張っているなかを出動しようとする、スト破りじゃないかと疑われて、もめたこともありまして。体育教官室にも学生がやってきて、いつまでも先生が戻っていらっしやらないので、学生たちに乱暴されているんじゃないかと心配したりしましたが、先生方は根気強く学生たちにつきあっていたらいいですね。」

そのころと現在では、学生の変化も著しいといわれます。長い駒場での経験から、いかがですか。「そうですね、世代的なちがいは、私自身にも経験があります。体育館の鍵の管理をしていたときです。昔の学生は『卓球場の鍵を貸してください』と、欲しい鍵の名称をきちんと聞いていたんですが、いつ頃からか、ただ『鍵』とだけ取りにくるようになりました。そういう学生には、『鍵ってどの鍵、鍵はいっぱいあるわよ』というふうに、できるだけ喋らせるようにしました。これは少子化現象や受験競争の激化と影響しているんじゃないかと思えますね。いつからか、親や先生が先回りして子どもの心配をするようになったような気がするんです。一方で、今の学生は優しくなってきたように思います。嫌なこと手伝ってくれることも多いです。」

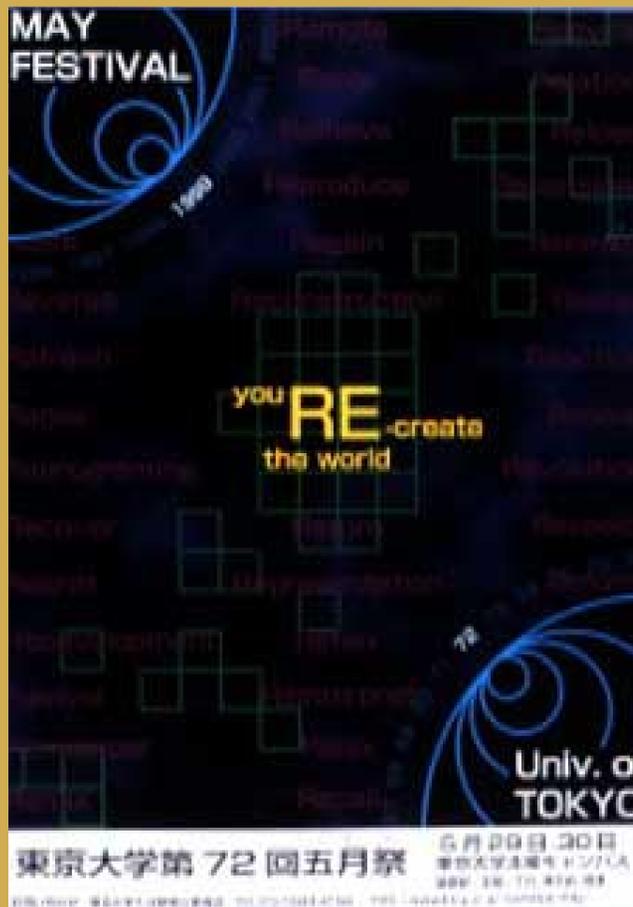
当時と今の大学で特筆すべきちがいは何でしょうか。「私は『大学』という雰囲気がどんどん失われてきていると思っています。大学紛争のことを話しましたが、ああいった会話や議論というのが今こそ必要なんじゃないですか。最近は先生も学生も職員もみんな忙しくして、会話や議論が減ってしまっています。学生の特権は、社会に出る前に距離をとったり、考えたり議論できるということだと思つてます。東京大学は、そういう意味でも、施設や先生方に恵まれているはずなんですけどね。」

石山さんにとって、今後の目標はどのようなことですか。「本当に個人的なことですが、私は体育研究室に勤めたことよって仕事面ではもちろんのことですが、人としてのお付き合いをはじめとして多くのことを学ばせていただきました。とても感謝しております。」

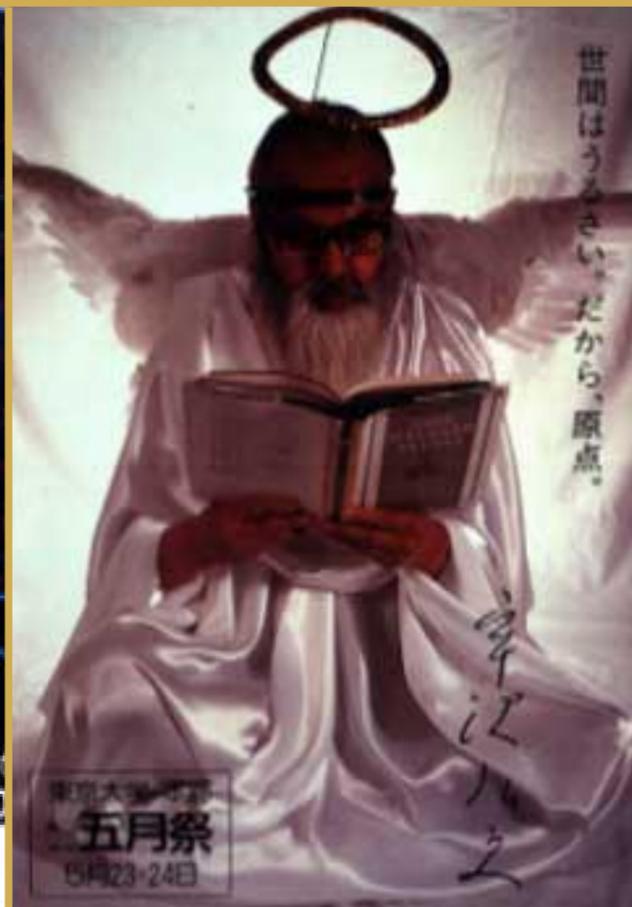
小林寛道先生 大学院総合文化研究科 教養学部教授）には合気道、文章などお教えいただきまして、そのほか、テニス、統計学、ドイツ語、エッセーと多くの先生方にお教えいただきました。それで一〇年くらい前から研究活動のようなことをさせていたいています。最近が高齢者の実態調査をしているんですが、面白いですよ。そういった研究をこれからもつづけていけたらいいですね。」



いしやま・やすえ 1945年千葉県に生まれる。1965年から東京大学教養学部勤務。現在は東京大学生産技術研究所に勤務、同人誌にエッセーを書くことを趣味としている。



3



2



1



© OSAMU HASHIMOTO

東大には、本郷と駒場のキャンパスこの祭りだけでなく、学生寮にも祭りがある。ここでは、全学的な祭りである五月祭と駒場祭をとおして、東大の今と昔を比べてみよう。

五月祭、駒場祭関係で東京大学史料室に残っているもっとも古いものは、一九五九年の第一回駒場祭のプログラムである。戦前にはじまった五月祭については、一九六三年の第三七回プログラムがもっとも古い。独占資本主義下における「大学」不在の大学からの報告」が、その統一テーマであった。この年は部分的核実験停止条約が調印され、ケネディ大統領が暗殺された年でもある。

東大紛争あるいは闘争中の一九六八年の駒場祭の資料は残っていない。混乱の中で収集できなかったであろう。とめてくれるなおつかさん」で話題になったことときのポスター（一）は、作者の画集から引用したものである。入試が行われなかった一九六九年の五月祭は中止になっている。

二度のオイルショックを経験した一九七〇年代の中頃までは、生硬で、長い文章の統一テーマが好まれていたが、徐々に言葉づかいに変化が表れてきた。たとえば、一九七五年の五月祭は、生きた現実の中の／我ら燃え上がる理性の群れ火！／歴史の激流のただ中に／築き上げよう／我らの真実を！／我らの時代を／我らのものにするために！というテーマであったが、一九七九年の五月祭では、「平穏な日々への眠りの影に、科学の旗の下に集おう、さあ、新しい風を！」とかわってきている。

東大生の祭

東大生の二大イベント、五月祭と駒場祭。ポスターやパンフレット、そしてそこに記される統一テーマは、社会への強烈なメッセージであり、時には社会を映し出す鏡であった。

一九八〇年代にはいと生硬な表現は姿を消し、駒場祭のテーマあるいは委員会アピールは、「平和・真実・自由 きみのために、ほくのために」（一九八二年）、「ヒト／ヒト／コマバサイノヒト」（一九八三年）、「パラレルワールド／橋架けて」（一九八四年）、「きみと、はなしがしたいんだ」（一九八七年）のように、短かい呼びかけ調になってきた。そして、馬鹿野郎、感性だけがすべてじゃない」というアピールが一九八六年の五月祭でなされていた。感性の時代を迎えたのかもしれない（一九八七年の五月祭ポスター）。

一九八五年のプラザ合意以降バブル経済を謳歌したこの時代は、一九八六年の流行語大賞に選ばれた「新人類」が出現した時代でもある。新人類の発想だろうが、一九九〇年の駒場祭のアピールは、「駒場に来た／東大生を見た／」と主客が入れかわっている。

一九九二年から一九九八年までの五月祭にはテーマもアピールもない。言葉が訴える力を失った反面、一九九四年の五月祭プログラムの表紙（一）や一九九七年の駒場祭のイラスト（一）に見るように、より直接的なビジュアルな表現が好まれるようになってきた。

感性の時代をもたらし経済成長が終わわり、超氷河期とも形容される就職状況で、産業・社会構造の激変を体感している学生たちにとって、再生への望みを託した「あ、」が一九九九年の五月祭のキーワードであった。

（柳澤幸雄 やなぎさわ ゆきお 大学院新領域創成科学研究科教授）



特集
東大生のいまむかし



6



5



4



先端科学技術研究センター

Research Center for Advanced Science and Technology

広く先端科学技術を俯瞰して、新領域を研究するのが先端研に課せられた本務であり、先端研の先端研らしいところは、新しいシステムをどんどん試行していくエネルギーと思っています。

先端科学技術研究センター、略称「先端研」のメンバーに一九九〇年に迎えられ、私が最初に驚いたのが教授会の活発さでした。教授、助教授、講師といった職や年齢に関係なく、いつも誰かが発言していました。しかも、きわめて建設的なのです。私もその活力に促され、赴任して二、三回目の教授会でちょっとした提案をしました。それは、教授会のたびに海外出張や研究員のリストなどの膨大な資料が配られるのを、OHPで写すだけにしたらというものです。驚いたことに、この提案は一瞬で受理され現在もつづいています。

今から考えると、これは先端研の教官の成り立ちに大いに関係していると思います。先端研のおよそ半分の分野が東大の他の部局を協力組織とし、約一〇年の任期中教官が派遣されてくるのです。また、残りの半分の教官は学外からおいでいただいています。教官一人ひとりが異なる文化を引き継いできており、教授会メンバーに共通する伝統の重みとが言い伝えといった考えが少ないのです。

先端研はそもそも、先端科学技術の各分野を推進する理工系の教官と、その社会、経済、政策とのかわりを研究する文系の教官からなっています。現在、理工系は物質デバイス、情報システム、生命の三大部門構成、文系は研究戦略・社会システムと知的財産権の二大部門からなり、さらに本年度から先端経済工学研究センターが誕生しました。

先端経済工学研究センターは、科学技術と経済の学際領域や融合という、これからの日本に必要な研究を目指しています。文理間の協力には知的財産権にかんするものもあり、TLO（技術移転組織）としての先端科学技術インキュベーションセンターがその中核になっています。理工系の先生はこのセンターを利用して技術移転を行おうとし、文系の先



教養学部

College of Arts and Sciences

1、2年生には大きな視野での学問の導入、大学院学生には専門性の高い先端的研究、これらと同じスタッフが担当することで、十年一律の入門講義やたこつぼ的な研究から脱することが可能だと思っています。

教養学部燕山夜話

若手Y助教授と古参F教授の対話

（東京大学教養学部のキャンパスは、本郷ではなく目黒区駒場にある。そのため、学内では「駒場」の通称で呼ばれることが多い。）

F 教授 Y先生はいらして二年目ですが、駒場の感想はどうですか。

Y 助教授 正直言って、キャンパスの汚さには閉口します。しっかりとメンテナンすすればとても素敵な大学になると思います。渋谷が近く、緑がいっぱい、とても魅力的です。ただ、女子学生が少ないですね。ほくはアメリカの大学を卒業したので、かなり驚きました。

F 以前に比べれば、これも増えたんですけど、それに、教官中の女性の比率は、東大では教養学部がトップなんですよ。

Y 銀杏並木を歩いていると、外国人学生をよくみかけます。学部の段階から留学に来ている学生が多いのはいいことです。

F 一、二年生では国費留学生、三、四年生では、AIKOM (Abroad in Komaba) という駒場独自の留学プログラムによるものが中心です。

Y 一番驚いたのは会議が多いことです。立派な先生方が身近にいてドキドキする毎日ですが、皆さん忙しそうで、ゆっくりお話しできません。

F 東大に入学したすべての学生が、駒場で最初の二年間を過ごしますが、これが前期課程教育。一部の学生は駒場に就いて専門教育を受けます。これが後期課程で、六学科あります。それに、文科系、理科系にまたがる総合文化研究科という大学院。この三つの組織を同時に運営する苦勞はたしかに並大抵ではありません。

Y 一年生から大学院学生まで一緒にいる

メリットはあるんですか。

F 一、二年生には大きな視野での学問の導入、大学院学生には専門性の高い先端的研究、これらと同じスタッフが担当することで、十年一律の入門講義やたこつぼ的な研究から脱することが可能だと思っています。

Y ぼく自身、アメリカでリベラル・アーツの学部を出たので、さまざまな領域の学問を提供する「教養学部」は、とつてもよいと思います。

F そこに、駒場の存在意義があるんです。平成三年に、一般教育科目と専門科目の区別が廃止されたのは知っていますか。それで、全国の国立大学では教養部を解体する方向に大きく動きまわりました。ところが、東大の駒場は、そもそも独自の専門課程をもつ学部でした。駒場のリベラル・アーツ教育に対する評価も高かったから、逆に、総合文化研究科という大学院をつくったんです。

Y でも、他の大学で教養部が解体されてしまったのなら、教養学部なんてアナクロだと思われているんじゃないですか。

F そうでもありません。駒場は、時代の要請に敏感で、教育の内容をいつも見直してきました。知識に対する幅広い視野と判断力、基礎的な知的枠組みと技能の習得、というリベラル・アーツ教育の目標をみさえ、前期課程の科目に大ナタを振るって大胆に再編成したんです。

Y 先生方はそれだけの理想をもつて取り組んでいるとしても、それが学生に伝わっているでしょうか。

F それについては、悲観したものでもありません。たとえば、駒場では、文系はもろろん、理系の学生も、外国語の習得に積極的ですし、学生の質がよいため、リベラル・アーツ教育の理念が空回りしないうですんでいるんです。

です。

Y たしかに、ちょっと試験問題を易しくすると、みんなとつてもない高得点を取るの大変です。進学振り分け制度が高い動機づけになっているのでしょうか。ただ、点取り屋さんになってしまうのが悲しいです。

F 前期課程で一年半勉強したうえで、専攻する専門分野を決めるという進学振り分け制度は、リベラル・アーツ教育の根幹を支えるものだと思います。たしかに、おっしゃるような弊害もあるのですが……

Y 点数のことだけでなく、今の学生には愕然とすることが多いんです。

F たしかに、基礎的素養に欠けている学生が増えてきました。文系の一年生を対象に小人数で行う、自分自身での課題の発見、文献の検索、論文の作成を課す基礎演習では、学習指導だけでなく生活指導までされている先生もいます。また、一、二年生の理系の物理と数学では複数のコースを設け、学生の入学時の到達度と学生の特性に対応しています。

Y 今までのお話は、一、二年生の授業はかりですか。

F 世界のトップ・クラスをいく研究だって沢山行われています。たとえば、創造性豊かな先端的研究にのみ認められるセンター・オブ・エクセレンス(COE)という制度があるんですが、平成一一年度から、複雑系による生命体システムの解析」というプロジェクトが始まりました。これは、物理、化学、生物、数学といった諸分野の研究者を融合した、まさに学際的な新しい学問の創造といえるものです。

Y 駒場がどんなにユニークか、少しわかっただけです。ぼくももうちょっと頑張ってみます。でも、会議はもっと減らしてほしいなあ。



小さな生物は飛行機や舟とはまったく異なる原理で飛んだり、推進したりしています。写真はカエデの種子の飛行原理を調べているところです。こうした新しい原理の研究もしています。

生はそれにより発生する知的財産権にかかわる諸問題を研究するといった連携がとれています。

ほかに、この一〇年くらいに、日本初の寄付講座の設置、社会人博士課程の設置、COE(センター・オブ・エクセレンス)への認定、国際・産学研究センターの設立、駒場オリーブラボラトリーの開設などを行ってきました。また、客員部門に官界や企業やジャーナリズムの方々においでいただき、その豊富な経験と、われわれにはない視点からの意見を得ることができるとも、先端研の視野を広げるのに大いに役立っています。

私自身は超伝導体を用いたピコ秒(光でも〇・三ミリしか進まないほどの短い時間)でスィッチするデバイスや、脳と同じように適応という形で内部構造を構成していく回路の研究をしています。バイオセンサー、セラミックス、ロボティクス、機能材料等々の研究室との研究協力も活発で、たとえば、隣の軽部研究室で行っている生体物質の化学合成に、

われわれが行っている遺伝的アルゴリズムを連動させることに成功し、共同でインキュベーションセンターを利用して特許を出願したこともあります。

先端研独特のテーマはとくにありません。いや独特のテーマはいくつもあった、どれかを特記するのがむずかしいというべきかも知れません。広く先端科学技術を俯瞰して、新領域を研究するのが先端研に課せられた本務であり、先端研の先端研らしいところは、新しいシステムをどんどん試行していくエネルギーと思っています。二一世紀に向けて、大学はいろいろな意味での改革が要求されています。先端研は、こうした改革を小さなスケールで行う実験の場として、今後も試行を続けていきます。とかく出る釘として良くも悪くも目立つ先端研を、あたたかい目で見守っていただけることを切に望んでおります。

同部洋(おかへよういち 先端科学技術研究センター教授・センター長)

スーパーカミオカンデ探検記

世界中から熱い視線を注がれている地下観測施設でのニュートリノ検出実験。
スーパーカミオカンデと呼ばれるこの実験を紹介します。

東京大学宇宙線研究所・神岡宇宙素粒子研究施設では、国内・海外から120名以上の研究者が観察に実験にいそんでいる。スーパーカミオカンデと呼ばれる、地下観測施設でのニュートリノ検出実験は、全世界をリードしている。素粒子研究の標準理論では、ニュートリノの質量をゼロと想定しているが、神岡ではニュートリノ振動という現象の観測に成功した。この現象は、ニュートリノに質量が存在する決定的な証拠であり、世界中から熱い視線を注がれているのである。

スーパーカミオカンデのある岐阜県神岡町は、富山県との県境近くに位置する。イタイイタイ病の源ともなった神岡鉱山でも知られ、スーパーカミオカンデにいたると同じ坑道を用い、今も亜鉛や鉛が採掘されている。戸塚洋二所長にお願いして、スーパーカミオカンデを見学させてもらった。坑道の入り口でヘルメットを着用し、車で中へ。普通のトンネルとちがって、削ったままの荒々しい姿。明かりも目印として遠くについているだけ。いたるところが特殊なプラスチックでコーティングされているのも、地上の生活からかけ離れた雰囲気を感じさせている。これは実験の邪魔になるラドンガスを排除するためである。研究では、このようにノイズと呼ばれる物質をいかに排除できるかがポイントになる。

実験の心臓部に相当するのがタンクの部分。現在は純水で満たされ閉じられているので中をのぞくことはできないが、その壁面には約11万2000個の光電子増倍管がびっしりと取り付けられている。ニュートリノに



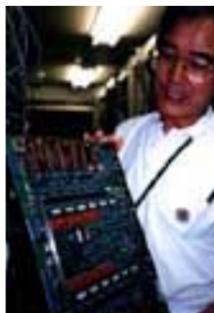
は、水の電子と反応し微弱な光を出す性質があるので、増倍管群がニュートリノの出す光をキャッチして信号として伝え、どの方向からやってきたかを、距離と時間差からコンピューターがはじきだす。1日に観測されるデータは文庫本5万冊分にのぼるが、そのなかからみつけられるニュートリノは10個程度。つまり、ほとんどがノイズなのである。忍耐が必要とされる作業。戸塚所長は、「これを精確に把握することが、実験データの信憑性を高めるために重要なんです」と、24時間体制で見守るスタッフの地道な苦勞を語る。また、タンクの上の天井はプラネタリウムのようなドーム型になっていて、この上の深さ1,000メートルの岩盤を支えているのだが、「こうした岩の力学を考えたり、観測設備の設計をするのも、スタッフの大事な仕事なんですよ。」

正直、私たちには、こういう研究が将来どのような意味をもつのか簡単にはわからなかった。結論からいえば、ニュートリノ実験の先にある陽子崩壊という

現象がとらえられれば、従来の物理学で永遠だとされてきた原子に寿命があるということになったり、疑問とされてきた宇宙の寿命がわかったりするそう。つまり、この研究は人間による壮大な「自分探し」の科学の実践といえるのかもしれない。戸塚所長は、陽子崩壊現象を神岡でとらえることについて、強い自信を語ってくれた。世界をあっという間にわたった研究のあとには、もっと壮大な夢が横たわっているのである。

記事 飯田崇雄、小川明子(大学院人文社会系研究科社会情報学専攻修士課程)

スーパーカミオカンデは、5万トンの超純水を蓄えた直径39.3メートル、高さ41.4メートルの円柱形水タンクと、その壁に設置された光電子増倍管と呼ばれる1万1146本の光センサーなどから成っている。ニュートリノがスーパーカミオカンデに飛び込んでくると、タンク内の水と反応して荷電粒子が高速で叩き出されることがあり、スーパーカミオカンデでは、この荷電粒子が水中を高速で走るときに発生する青白いチェレンコフ光と呼ばれる光を光電子増倍管で検出するのである。しかし、ニュートリノがこのような反応を起こすのはきわめてまれで、標的となる水が大量に必要となる。また、チェレンコフ光はとても微弱なので、光が減衰しないように超純水が必要とされる。検出器は、観測の邪魔になる宇宙線を避けるために、地下深くに設置されている。



説明する戸塚洋二所長



大型水チェレンコフ宇宙素粒子観測装置(スーパーカミオカンデ)



University of Tokyo Center
for Study and Research in Florence

東京大学フィレンツェ教育研究センター

教育研究の国際化をめざして

『東京大学、フィレンツェに上陸』これは、イタリアのフィレンツェ市に1999年3月5日に公式オープンした「東京大学フィレンツェ教育研究センター」について、3週間ほど経ってから、地元日刊紙が掲載した紹介記事の見出しである。この記事は、前日に電話インタビューに応じた私の説明に基づいてセンターの概要を報じ、このセンターがいわば東大からイタリア・ヨーロッパに渡された橋の先端であり、二つの文化の融和に向けての前進の一步だと好意的に評している。ただ、布告を発するでもなく用心深く忍び足でフィレンツェに上陸したと冒頭で述べているのは、事前にオープニングを新聞社に知らせなかった私たちへのやんわりした批判だろうか。広報活動侮るべからず。

さて、本センター(通称、フィレンツェ拠点)は、東京大学海外学術交流拠点の一つとして、学術の国際交流をはかり、東京大学の教育研究の発展に資することを目的に設立された。全学の利用を前提にした施設であるが、設立準備から当面の運営は、大学院人文社会系研究科・文学部が担当している。本センターが、フィレンツェ大学をはじめとする高等教育研究機関や学術団体との交流の推進基地となり、本学教職員・学生の研究・研修・教育の拠点として機能するよう、目下体勢を整えつつある。現地の学術機関との交流の範囲は、本学で研究教育がなされている、あらゆる分野を想定している。

フィレンツェはいうまでもなく、西欧近代の幕開けとなったイタリア・ルネサンスの中心都市である。その豊富な文化財で世界中の観光客を呼び集めていることも、また周知のとおり。この町はまた、フィレンツェ大学のほかイタリア有数の研究所、アカデミー、図書館を擁し、市内や近郊に欧米の大学・研究所の施設が集中する学術都市でもある。なかでもアメリカは、美術史家B・ベレンソンゆかりのヴィツァを所有するハーバード大学をはじめ、多数の大学が分校や研究施設をもち、その多くが自国の学生のために恒常的に授業を行っている。フィレンツェに集まるこれらの学術教育機関の仲間入りをした東大のセンターが、研究に教育に、豊かな成果をあげることを願っている。

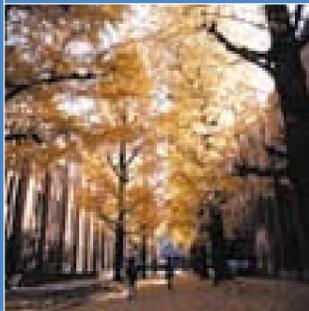
百聞は一見にしかず。情報探索の手段が以前と比べ飛躍的に発達した現在でも、現地にあってはじめて感得されるものはなお多い。ヨーロッパ文化の粋ともいえるフィレンツェにおいては、なおのことそうであろう。一人でも多くの方がフィレンツェ拠点に足を運ばれんことを。

本センターは、フィレンツェ旧市街の北寄りに位置する建物の2階に設けられている。鉄道の中央駅、サン・マルコ修道院、フィレンツェ大学本部からも近い。広さは中2階部分を含め約250平方メートル、会議室、研究室、図書室のほか、台所と寝室も設置されている。本センターについての問い合わせ、利用申し込みは大学院人文社会系研究科事務部庶務掛で受けつけている。

長神 愷(ながみ さとる 大学院人文社会系研究科教授)



センター外観 左
センター内部 上



本誌創刊号の編集にあたっては、学内
はもとより学外の方々からも多くのご助
力をいただきました。写真の使用に関
しては、東京大学アルバム編集会、フ
ランス共和国大使館、橋本治氏をはじ
め多くの方々にご協力いただきまし
た。

編集発行 東京大学広報委員会

編集委員 大塚柳太郎
大学院医学系研究科教授

谷口将紀
大学院法学政治学研究科助教授

鈴木真理
大学院教育学研究科助教授

仁科博史
大学院薬学系研究科助教授

小森田秋夫
社会科学研究所教授

柳澤幸雄
大学院新領域創成科学研究科教授

及川雅勝
企画調整官

印刷・製本 印象社

発行日 平成11年10月30日

お問い合わせ先

東京大学総務部総務課広報室

〒113-8654

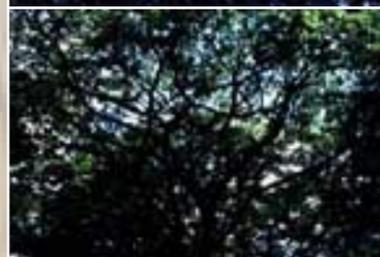
東京都文京区本郷7丁目3番1号

電話 03-3811-3393

FAX 03-3816-3913

E-mail:kouhou@adm.u-tokyo.ac.jp>

URL<http://www.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>



医学部本館前の
カラスザンショウ
(*Zanthoxylum ailanthoides*, ミカン科)

中 複数の叢生したカラスザンショウの枝。
秋には先端についた果実が実る。
東洋文化研究所横。
下 カラスザンショウの枝振り。懐徳館。

附属図書館東側の
ケヤキ
(*Zelkova serrata*, ニレ科)

冬に落葉する広葉樹だが、その樹形は常緑
の照葉樹のように円々としている。



キャンパス樹木園
東京大学の本郷キャンパスは上野公園の西
につづく緑地で、建物を被り隠すようにたく
さんの木が育っている。植えた木もあるが、
なかにはどうみても自然に芽生えたとしか考
えられない木もかなりある。並木の多くは下
枝を切りつめないように仕立てられ、ゆつた
りとしている。三四郎池の周辺や懐徳館の庭
園は、都心とは思えない濃い緑に包まれてい
る。だれでもがひとときを緑陰に遊べる環
境は、大学のキャンパスにこそ似つかわしい。
それだけでなく、キャンパスはさながら木
もつ多様さを目のあたりに見ることができ
る樹木園のようだ。

生きた木の博物館ともいえる樹木園に必要
な条件のひとつは、いろいろな種の木がある
ことだが、ここには一 種の種を異にする木
を見出すことができる。ヒトツバタゴ、アカ
ガシワ、ヒロハノミズバイ(?)のように、
都心ではほかにあまり見かけない種もある。
また、本郷キャンパスには落葉樹も常緑樹も
あり、夏は熱帯の、そして冬は温帯の気候下
にある東京にふさわしい。ここでは秋の木と
もいえる二種を紹介しよう。

に、大きな樹冠を広げるのはオオバモクゲン
ジというムクロジ科の落葉樹である。中国南
部原産で各国で広く栽植されているが、寒さ
には弱く日本では関東以西でまれに見かけ
る。ひとつの葉がいくつもの小葉に分かれる
大きな複葉をもち、夏は樹下に大きな木陰を
つくる。夏に花をつけ、秋には紙風船のよう
に膨らんだ果実がたくさんなる。
いくつもの小葉という部品から組み立てら
れる複葉は熱帯の木に多い。カラスザンショ
ウも複葉をもち、生長が速い。キャンパス内
のあちこちに見られるがほとんどが自然生で
ある。東洋文化研究所の南側のフェンスの内
側に芽生えてしまった株は、建物から離れた
空間に枝を広げるため、幹がフェンスのここ
ろで折れ曲がるように生長をつづけ、いまで
はフェンスが幹に押し倒されかけている。そ
の逞しさは、ふつう植物にいだく静かな印象
からは遠い。カラスザンショウはミカン科の
植物で、独特の臭いをもつだけでなく、葉を
透かして見ると、ミカンの皮とおなじように、
油点という小さなつぶつぶがたくさんあるの
がわかる。

そつえば、秋に多い大風の日には、たく
さんの枝が路面に落ちていたのを目にする。
生きるために光を必要とする木は、枝が互い



経済学部角の
オオバモクゲンジ
(*Koelreuteria bipinnata*, ムクロジ科)

初秋に咲く黄色い花が終わると紙風船に似た果実が
なる。

キャンパス散歩

ふだん何気なく行き交うキャンパス。
その豊かな環境に眼を向けると、
見過ごしがちな自然に出会う。



散歩人



大場秀章

▶ 展 示

総合研究博物館企画展示、社会情報研究所
創立50周年記念展覧会「ニュースの誕生～か
わら版と新聞錦絵の情報世界」
10月8日(金)～12月12日(日)10:00～17:00
(入館は16:30まで、月曜日休館) 総合研究
博物館展示室
問い合わせ: 総合研究博物館庶務掛
☎03-5841-2802



かわら版「大津ふねぶし」1855年
社会情報研究所蔵

▶ 公開講座

第21回生研公開講座イブニングセミナー「物
の性質と構造を探る ミクロからマクロまで」
10月1日(金)～12月10日(金)の各曜日18:00
～19:30 / 生産技術研究所第一・第二会議室
問い合わせ: 生産技術研究所総務課庶務掛
☎03-3402-6231 内線2005、2006

第6回東京大学教育学部公開講座「教育のオル
タナティブす いま 教育の常識を問い直す」
10月30日(土) 教育学部附属中・高等学校
11月6日(土) もみじ山文化センター西館
11月20日(土) もみじ山文化センター西館
12月4日(土) 教育学部附属中・高等学校
時間はすべて14:00～17:00
問い合わせ: 教育学部公開講座係
☎03-5841-3902

大学院数理学部研究科公開講座
11月28日(日) 大学院数理学部研究科
問い合わせ: 大学院数理学部研究科
楠岡成雄 ☎03-5465-8316

第6回東大附属ワークショップ
12月2日(土) 教育学部附属中・高等学校
問い合わせ: 附属中・高等学校事務室
☎03-5351-9660

▶ 一般公開

千葉実験所公開
11月12日(金)10:00～16:00 / 生産技術研
究所千葉実験所
問い合わせ: ☎043-251-8311

▶ 記念行事

新領域創成科学研究科創立記念事業
11月12日(金) 大講堂、御殿下記念館ジムナ
ジウム
問い合わせ: 新領域創成科学研究科総務掛
E-mail<n-shinkawa@ku-tokyo.ac.jp>

▶ 弁論大会・演奏会

東京大学総長杯争奪全国学生弁論大会
12月17日(金)10:00～18:00 / 大講堂
問い合わせ: 学生部学生課教養掛
☎03-5841-2529
吹奏楽部定期演奏会
12月19日(日)15:30～ / 川口リリア
*500円(全席自由)
問い合わせ: 学生部学生課教養掛
☎03-5841-2529
音楽部管弦楽団定期演奏会
12月18日(金) ヨサントリーホール
問い合わせ: 学生部学生課教養掛
☎03-5841-2529

▶ シンポジウムなど

農学部公開セミナー
11月6日(土) 農学部1号館
問い合わせ: 農学系総務課広報情報処理掛
☎03-5841-5484
分生研セミナー
講演者: Heinz G. Floss 教授
11月12日(金)15:00～16:00 / 分子細胞生
物学研究所総合研究棟2階会議室
問い合わせ: 分子細胞生物学研究所生理活性
物質研究分野 ☎03-5841-7840

公開シンポジウム「日本の理科教育と大学教
育を考える」
11月13日(土)13:30～、11月14日(日)9:30
～ / 教養学部900番教室
問い合わせ: 大学院総合文化研究科「高等教育
フォーラム」代表: 松田良一
☎03-5454-6637

URL<http://matsuda.c.u-tokyo.ac.jp/forum/>
第6回シンポジウム「光触媒反応の最近の展開」
11月26日(金)9:00～18:00 / 大講堂、山上
会館大会議室ほか
問い合わせ: 大学院工学系研究科応用化学専攻
藤嶋昭
E-mail<photocat@fchem.t.u-tokyo.ac.jp>

地震研究所談話会
11月26日(金) 12月24日(金)13:30～ / 地震
研究所第一会議室
問い合わせ: 地震研究所研究協力掛
☎03-5841-5677

農学部長主催特別講演会「21世紀の日本に
おける農業・農村の役割」
11月27日(土) 農学部1号館
問い合わせ: 農学系総務課
☎03-5841-5004

第8回原子力研究総合センターシンポジウム
12月1日(水) 2日(木)9:30～21:00 / 山上
会館大会議室
問い合わせ: 原子力研究総合センター 柴田裕
実 ☎029-287-8476

日本性感染症学会
12月5日(日) 大講堂、山上会館大会議室
E-mail<sakano@m.u-tokyo.ac.jp>

第6回日本行動医学会 JSBM 学術総会 / 第
12回日本心理医療諸学会連合 UPM 大会
12月10日(金) 11日(土) 大講堂、山上会館
大会議室
問い合わせ: 大学院医学系研究科・医学部公衆

衛生学教室内 横山和仁

☎03-5841-3494
考古科学シンポジウム
12月22日(水)9:30～17:00 / 山上会館大会
議室
問い合わせ: 原子力研究総合センター 小林紘
一 ☎03-5841-2945
AGS 2000 Annual Meeting
12年1月 / マサチューセッツ工科大学 MIT)
問い合わせ: URL<http://esc.u-tokyo.ac.jp/
ags/index.html>
* AGSはAlliance for Global Sustainabilityの
略称で、東京大学、マサチューセッツ工科大学、
スイス連邦工科大学による共同プロジェクト。
「超高速光エレクトロニクスの展開」
12年1月中旬 / 工学部11号館講堂
問い合わせ: 大学院工学系研究科電子情報工
学科 土屋昌弘
URL<www.ktl.t.u-tokyo.ac.jp/UFOE-ws>
固体 / オプトエレクトロニクス研究会
12年2月16日(水) 午後 / 工学部3号館
問い合わせ: 大学院工学系研究科電子工学専
攻 中野義昭 ☎03-5841-6652
URL<http://www.ee.t.u-tokyo.ac.jp/
nakano/lab/bulletin_board/>

東京大学同窓会連合会のご紹介

東京大学には、学部・学科にまたがる全学の
同窓会はこれまでありませんでした。数年前より
東京、大阪、名古屋などそれぞれの地域ごとに
同窓会が結成され、活発な活動が開始されたこ
とも契機となり、平成9年4月22日、向坊隆元総
長を会長に迎え東京大学同窓会連合会が誕生
しました。本郷の大学構内の学生部分室に事務
所を開設し連絡の拠点にしています。

同窓会連合会の会員は団体加入方式で、地
域同窓会を正会員とし、学部・学科などの同窓
会を特別会員としています。現在の正会員は、
東京銀杏会(会長・長岡實) 関西東大(会長・
新宮康男) 東海銀杏会(会長・松本省吾) 神奈
川銀杏会(会長代行・曾山皓) 千葉銀杏会(会
長・玉置孝) 埼玉銀杏会(会長・上田治三郎)
茨城銀杏会(会長・石川周) 福岡銀杏会(会長・
山下敏明) 熊本淡青会(代表幹事・本田憲之
助) 鹿児島銀杏会(会長・岩男秀彦)の10団体
で、生損保銀杏会(会長・徳増須磨夫)が特別会
員になっています。

連絡先: 東京大学同窓会連合会
〒113-0033
東京都文京区本郷7-3-1
東京大学学生部分室
TEL03-5841-2459

駒場祭

11月21日(日)～23日(火)
東京大学駒場キャンパス
目黒区駒場3-8-1(京王井の頭線
「駒場東大前 駅下車すぐ」)